

フロンティアスクール用報告書

都道府県名	広島県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	口和町立口和中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	4	13
生徒数	15	18	25	1	59	

研究の概要

1 研究主題

<p>「基礎・基本の定着をめざし、意欲的に学ぶ生徒を育成する」 ～一人一人の生徒が確かな学力を身に付けるための学習評価の充実～</p>

2 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>1, 2, 3年生 英語, 数学 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であり、効果的な指導方法の在り方を研究していくため</p>
--

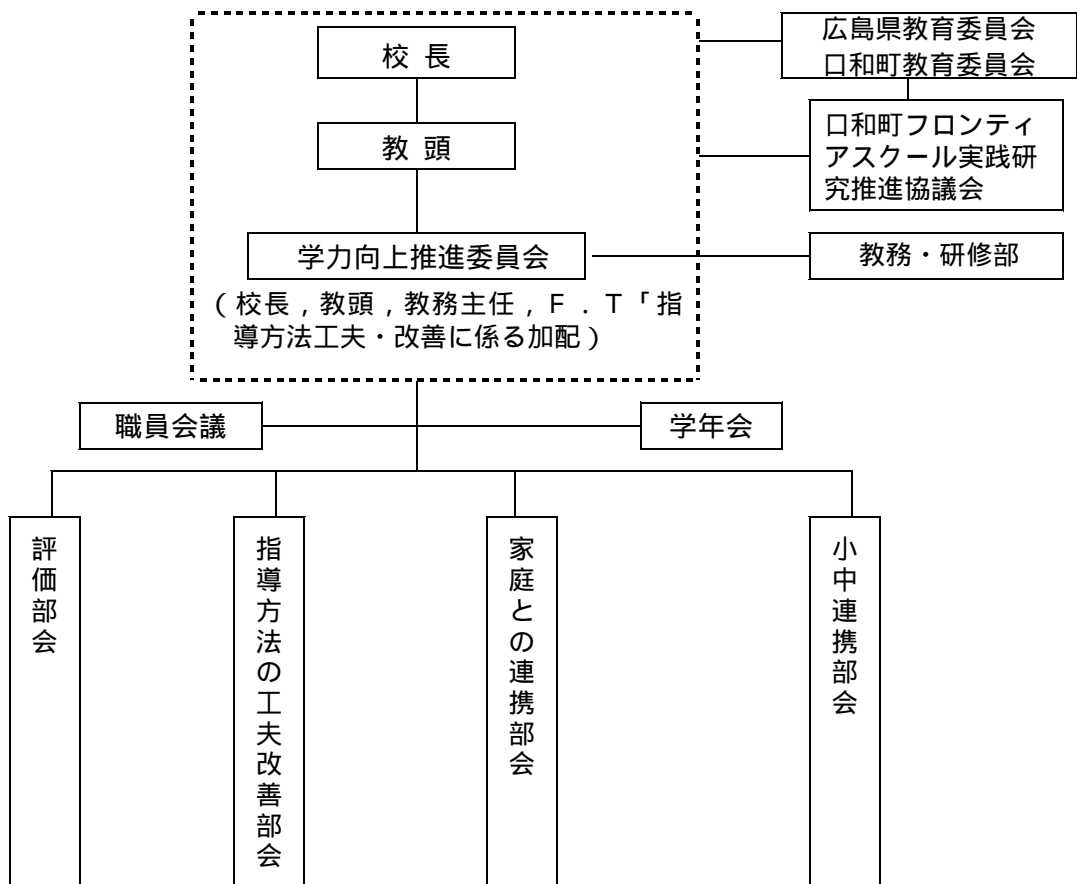
(2) 年次ごとの計画

<p>テーマ 一人一人の生徒が確かな学力を身に付けるための学習評価の充実 研究の見通し（仮説） 学習評価（自己評価・相互評価）を充実していくことにより、生徒は学習活動に意欲的に取り組むようになり、確かな学力が身に付くであろう。</p> <p>平成15年度 ・目標を明確にして、学び方（目標への迫り方）を明らかにした授業を展開することにより、生徒は学習活動がしやすく、意欲的に取り組むのではないか。 ・生徒の自己評価を活用して授業を進めれば、生徒は自分で学習を振り返り、確かな学力を身に付けるのではないか。</p> <p>研究の内容・方法 ・全職員で研究を推進していくために、評価部会、指導方法の工夫改善部会、小</p>

	<p>中連携部会，家庭との連携部会の4部会を構成して実践を進めていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒自身に達成感を味わわせる学習評価の工夫 ・英語，数学を中心として指導方法の工夫改善の研究を進める
--	---

平成16年度	<p>テーマ</p> <p>一人一人の生徒が確かな学力を身に付けるための学習評価の充実 研究の見通し（仮説）</p> <p>学習評価を充実していくことにより，生徒は学習活動に意欲的に取り組むようになり，確かな学力が身に付くであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導方法の工夫改善を図るとともに，生徒自身に達成感を味わわせる学習評価の工夫の研究 ・個に応じた指導に効果的な「単元の学習形態モデル」づくり <ul style="list-style-type: none"> - 学習評価のいかせる単元計画づくり - ・〇和町フロンティアスクール実践研究推進協議会の中の部会等を中心とした小中連携の充実
--------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1 研究の成果

研究成果

学習評価を工夫することにより、自分の学習内容の定着状況や課題をとらえることができるようになり、次の授業への意欲につながり、学力が定着しつつある。

(1) 研究前の生徒の実態と課題

本校には町内の2校の小学校から入学してきており、全校生徒は59名という小規模校である。

生徒は落ち着いて生活しており、授業等まじめに取り組んでいる。

平成14、15年度「基礎・基本」定着状況調査の通過率は図1のグラフの通りである。このなかで、国語では読むこと、書くこと、言語事項、数学では数量関係、英語では話すことや書くこと等の自分の考えを整理して発表することなどに課題がある。

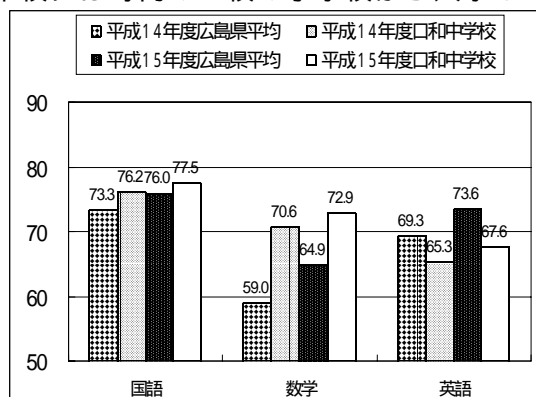


図1 平成14,15年度「基礎・基本」定着状況調査結果

また、平成15年度の生活や学習に関する意識調査結果は、図2の通りである。

(単位 %)

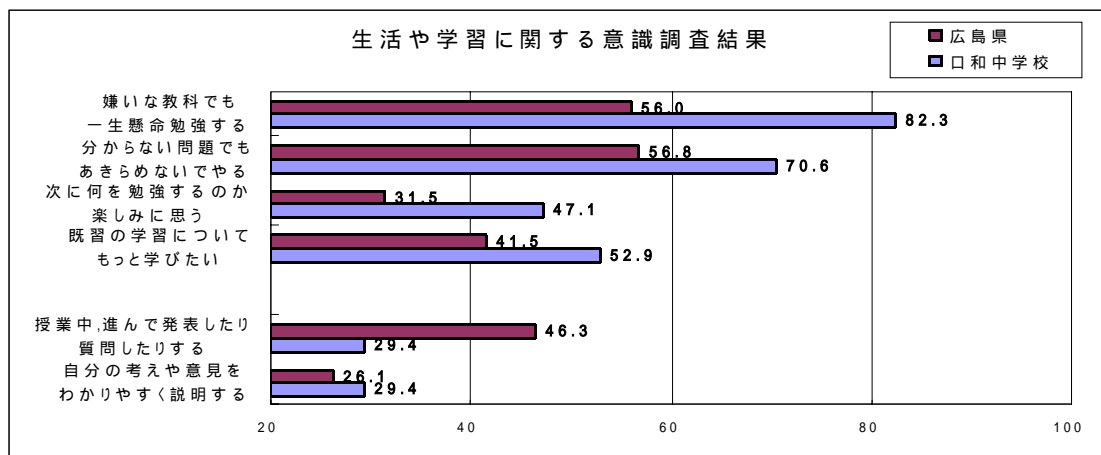


図2 平成15年度 生活や学習に関する意識調査結果

このことから、各教科とも領域ごとに課題はあるものの、学習に対する意欲や目的意識は決して低くないことがわかった。しかし、自分なりの考え・意思をもたせた学習を進めることの必要性がみえてきた。

(2) 研究の具体

学習評価の工夫

本校では評価を，生徒にとっては自らの学習状況に気づき，自分を見つめ直すきっかけとなりその後の学習や発達を促す，また教師にとっては評価の結果によって後の指導を改善し，さらに新しい指導にいかすにとらえ，実践している。

英語科では，一斉指導をT・Tで進め，理解度確認テスト（20問）をした後，習熟度別授業を行っている。習熟度別授業を実施する中で，評価を次のように進めていった。

- 習熟の程度に分けたコース（基礎コース・発展コース）の学習指導計画の作成
- 習熟の程度を踏まえ，別々のコースに共通する項目を明確にした評価規準の作成
- 習熟の程度に応じた指導と共通する評価規準及び評価方法による評価の実施
- 各コース担当の打ち合わせ

学習指導計画における評価規準や評価方法の見直しと検討

授業を進めていく際に，生徒の自己評価を重視した。そのために，生徒自らが自分自身のつまづきや課題を見つけたり，自分の興味・関心のある課題をさらに深めたりできるように自己評価表を工夫し，自己評価をさせている。それを基にして授業後に連携し次時の授業にいかしている。また，自己評価と教師の評価規準による評価をからめることにより，指導と評価の一体化を図る取り組みをしている。

単元の学習形態モデル

英語科においては，次のような単元の学習形態で授業を展開していった。

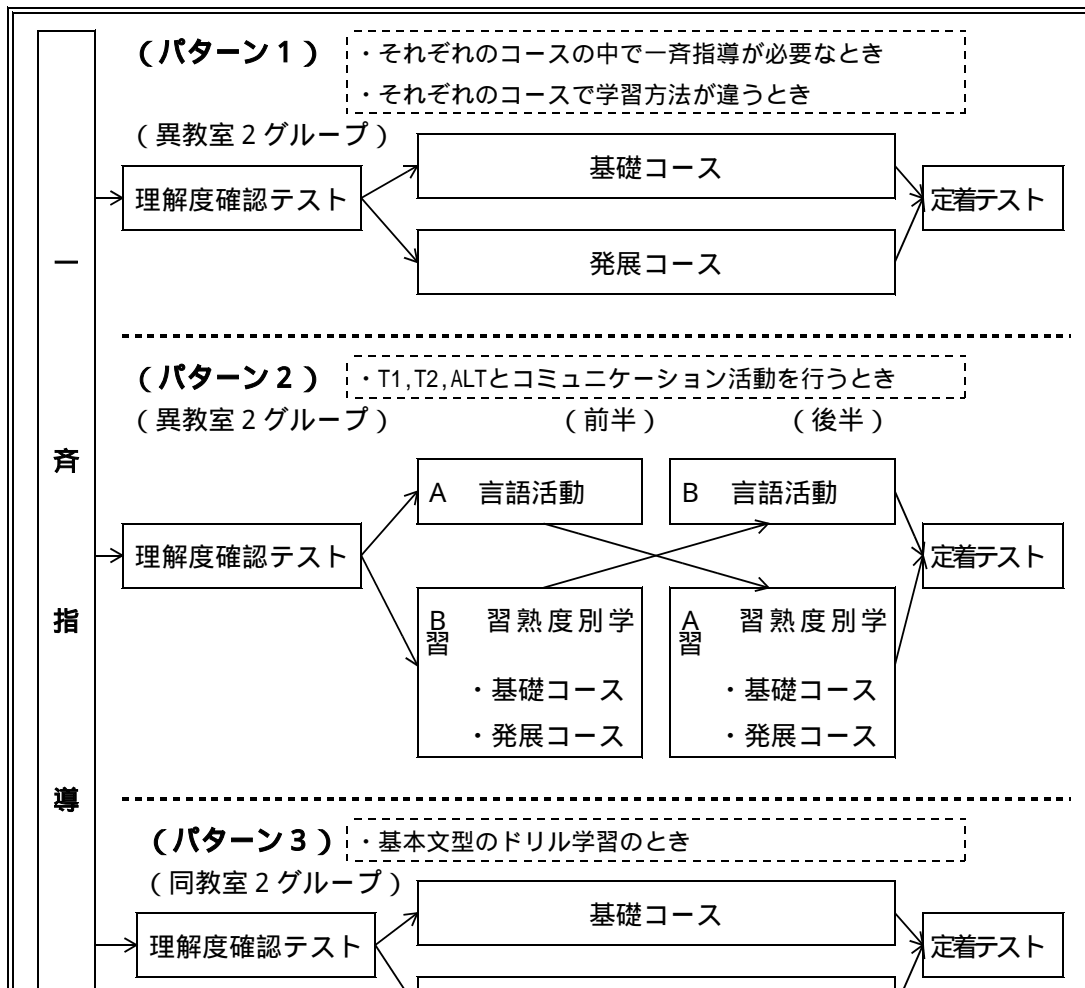


図3 英語科学習形態モデル

このように展開していく中で、学習評価の工夫を行った。

(3) 考察 - 英語科 - 3年生(Columbus21 English Course)の实践から
自己評価の工夫(パターン1の理解度確認テストの前の授業)から

- 単元名 Unit 7 Takuya's Reply
- 単元のねらい 間接疑問文を理解し、それを用いた英語を聞いたり、話したり、書いたりすることができるようになる。
- 自己評価の方法 導入時 ・図4の自己評価表を使って、学習目標(評価規準)を明らかにする。
 終結時 ・図5のワークシートを使い授業を行い、自己評価をするとき、学習事項をいかして尋ねたり書いたりする目標への達成状況を数値で示す。
 ・もっと教えてほしいことを書く。

図4 自己評価表

図5 ワークシート

授業の最後に生徒が書いた図4の自己評価表の授業のねらいに関する項目の状況を表1のように生徒の自己評価を集約してみた。

(単位:人)

評価項目	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
間接疑問文が理解できた	1	20	4	0
間接疑問文を用いて尋ねることができた	5文できた	3文できた	1文できた	できなかった
	23	1	1	0
間接疑問文を用いて書くことができた	5文できた	3文できた	1文できた	できなかった
	19	5	1	0

表1 授業後の生徒の自己評価

ほとんどの生徒が、この時間のねらいを達成している。「もっと教えてほしいこと」では、さらに学びたいという意欲をみせていた。また、理解度確認テストを行った後、習熟度別学習の「発展コース」では図5のワークシート以外の間接疑問文の使い方、文章の中での使い方等を中心に指導した。基礎コースでは、間接疑問文の作り方、それを用いた尋ね方や答え方を具体例を挙げて指導した。

基礎コースでの英語の苦手なA男への取り組み

考察 の授業での自己評価

間接疑問文が理解できた	あまりあてはまらない
間接疑問文を用いて尋ねることができた	3文
間接疑問文を用いて書くことができた	3文

理解度確認テスト 20問中 8点

基本コースで指導

- ・間接疑問文の作り方、それを用いた尋ね方や答え方を具体例を挙げて指導

自己評価 ・自分の分からないところがあった。
 ・理解しようとした。

間接疑問文が理解できた	ややあてはまる
間接疑問文を用いて尋ねることができた	5文
間接疑問文を用いて書くことができた	5文

定着テスト 20問中 16点

基礎コースで具体例を示して指導した結果、定着テストにおいて伸びをみせた。生徒の自己評価をいかし次の授業を進めていったことが定着につながっていったと考える。

しかし、生徒自身の自己評価、定着テストを見ると完全に定着したとはいえない。理解度確認テスト、定着テストを含め、習熟度別指導における個に応じた指導に課題が残った。

相互評価の工夫

全ての授業の初めに基本文法事項・新出語の定着、会話活動に慣れることをめざし、ペアワーク（10問のQ & A）を行い、16点満点で相互に評価する。

- ペアワークによる相互評価の方法
- ・毎時間違う人とペアを組み、ペアワークを行う。
 - ・採点基準を決め、図6の相互評価表に記入する。

		Date					Box M F
Points		/	/	/	/	/	
何もせずに答えること たかひまたたか	たかひ たか						
相手の顔を見ながら答える たか	たかひ たか						
声の大きさを たか	たかひ たか						
自然な・正確な たか	たかひ たか						
Total Score (/16)							
Signatures							

図6 相互評価表

Unit6, Unit7 (1 1月, 1 2月実施) のペアワークにおける相互評価の結果は図7の通りである。取り組みにも慣れ, 着実に平均点は上昇している。

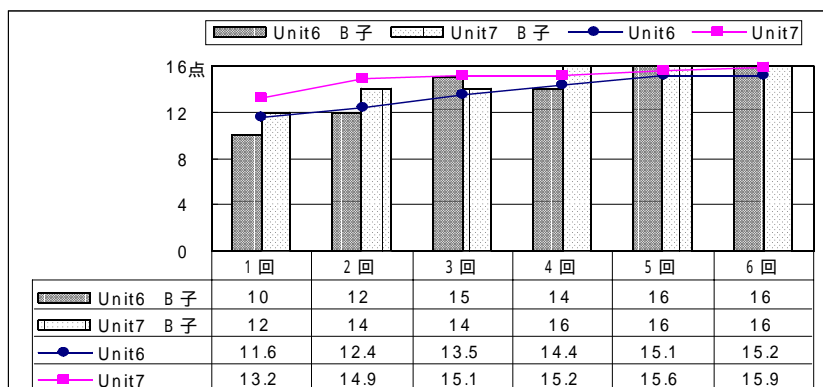


図7 相互評価 B子の得点, 合計点の平均の推移

相互評価をさせる際の工夫として, ×方式から, 点数方式に変えた。評価の基準を明らかにし細かくすることにより, 学習内容の定着状況が生徒自身にもわかりやすくなり, また相手のことを評価しやすくなっている。

ペアワークを嫌がっていたB子への取り組み (図7の棒グラフ)

2年生の4月の時点では, 「恥ずかしい, イヤだ」という思いが強くペアワークを嫌がっていた。しかし, 継続的な取り組みにより慣れたこともあり, 抵抗感が薄れていった。また評価方法が変わったこともあり, 3年生の11月には, 「自分がどれくらいなのか分かる。見直せる」と前向きに取り組んでいる。「簡単なものなら覚えらる」とも自己評価をしていた。B子の思いに応えるために, 既習の事項や語を使い, ペアワークを工夫していく。そのことが, 会話活動の応用力を付けることにつながっていきと考えられる。

(4) 現在の生徒の状況

平成15年度「基礎・基本」定着状況調査 (英語) の推移から - 2年 英語科 - 平成15年度「基礎・基本」定着状況調査 (英語) と, 同じ調査を平成16年1月に実施しその通過率を比較した。結果を比較すると, ほとんどの項目に伸びが見られた。特に顕著な伸びが見られる項目は, 図8の通りである。

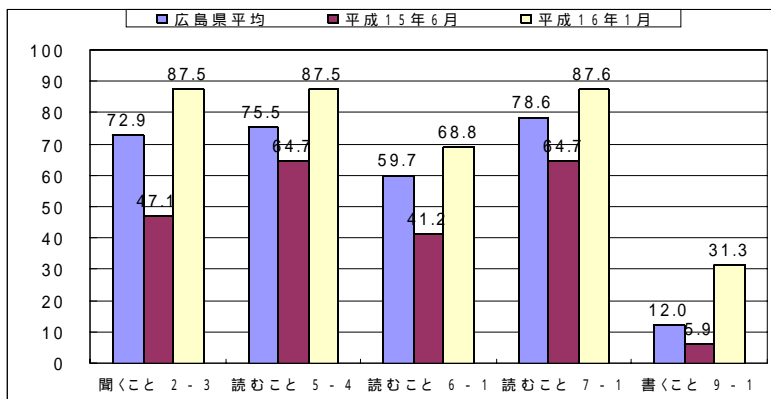


図8 平成15年度「基礎・基本」定着状況調査 (英語) の推移 (抜粋)

「聞くこと」「読むこと」においては，授業初めにウォームアップとして行っているペアワークによるQ & Aの取り組みや，T・Tでできるだけ英語を用いて授業を行ってきたことにより伸びてきたものとする。

「書くこと」については，ほぼ全員の生徒が英語で文を書こうとする傾向がみられるようになった。

毎時間の対話練習など，自己評価，相互評価を取り入れて授業を生徒と創っていくことにより，学力が定着しつつあることがわかる。

教科の学習に関する調査（英語）の推移から - 2年 英語科 -

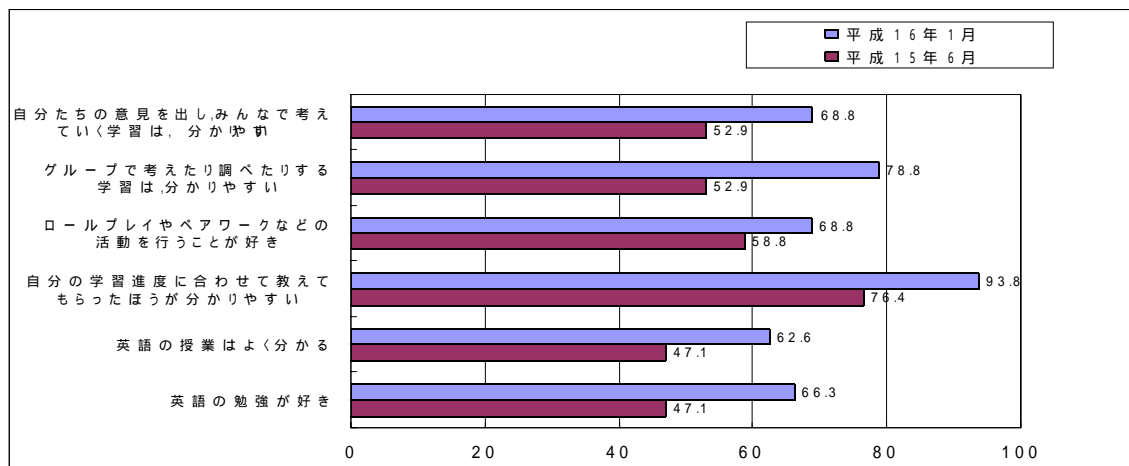


図9 教科の学習に関する調査（英語）

約6ヶ月間の取り組みの結果である。ほとんどの項目で大きな伸びが見られた。毎時間ペアワークを行っていることにより、「ロールプレイやペアワークなどの活動を行うことが好き」の項目が伸びている。また，自己評価を取り入れ授業を進めることにより「英語の授業がよくわかる」ようになり、「英語の勉強が好き」になってきている。このように授業への積極的な参加の姿勢が見えている。これらのことから，学力の伸びはこうした意欲が支えていると考える。

2 今後の課題

- ・すべての教科において，生徒自身に達成感を味わわせる学習評価の工夫
自己評価表，相互評価表の工夫と，評価をいかした指導方法の研究
- ・個に応じた指導の効果的な「単元の学習形態モデル」づくり
- 学習評価のいかせる単元計画づくり -
- ・口和町フロンティアスクール実践研究推進協議会の中の部会等を中心とした小中連携の充実

学力把握のための学校としての取り組み

個々の生徒の客観的な学習状況の把握や、これまでの結果と比較して指導にいかす

- ・標準学力検査（CRT）、標準学力検査（NRT）
- ・広島県「基礎・基本」定着状況調査
- ・定期テスト、単元テスト、理解度確認テスト、終末テストの分析
- ・生活実態調査、アンケートの分析
- ・生徒の意識調査、分析

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・研究公開の実施 平成15年12月9日（火）
研究主題「基礎・基本の定着をめざし、意欲的に学ぶ生徒を育成する」
- ・研究紀要を全保護者、町内の教育関係者等配布
- ・学力向上フロンティア事業に係わる発表会 平成16年1月27日
- ・研究公開の実施予定 平成16年10月5日（火）
- ・HPによる公開
- ・PTA総会、たより等により公開

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	3学級以下	4～6学級		
	7～9学級	10～12学級		
	13～15学級	16学級以上		
【指導体制】	少人数指導 その他	T・Tによる指導		
【研究教科】	国語	社会	数学	理科
	外国語	音楽	美術	技術・家庭
	保健体育	その他		
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	